

「研ぎの文化」を守り伝える

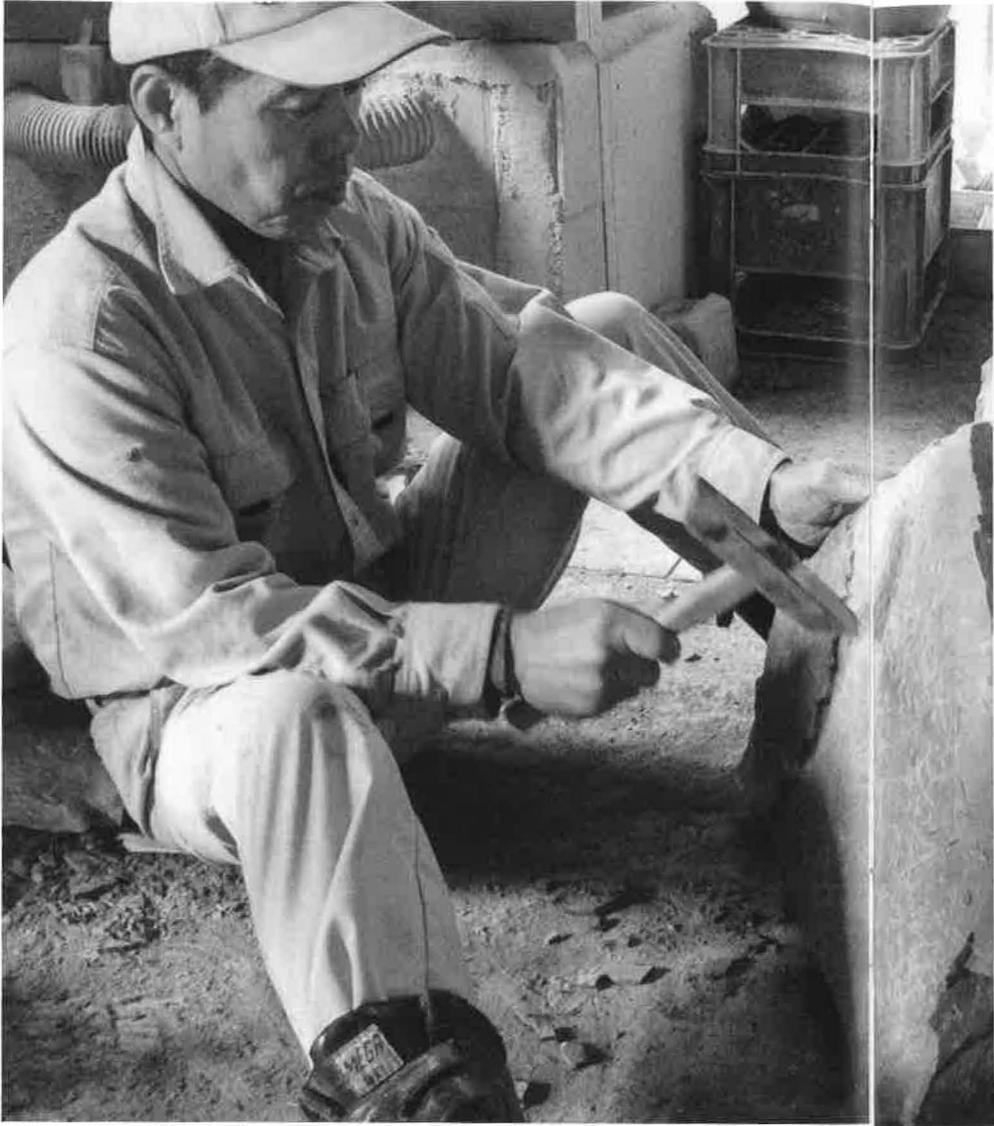
「天然砥石採掘業」砥取家「四代目」

土橋要造さん

昭和三十年代後半頃までだったろうか、どの家庭の台所でも流しの片隅で砥石をみかけることができた。当時のことだから、もちろん天然砥石である。その後、人造砥石の登場により天然砥石は急速に家庭から姿を消した。砥石山の鉾山も閉山につぐ閉山。今も採掘を続ける砥石山は、全国でも数えるほどしかない。

しかしながら、いまだに天然砥石の「研ぎ味」に愛着を持ち、愛用する人たちは少なくない。大工、料理、刀剣、指物、木工、漆工芸、彫刻など伝統産業の分野に携わる人たちのあいだでは根強い人気がある。というより、なくてはならない必需品である。天然砥石を使った「研ぎ」を趣味にする人たちもいる。

そんな愛好家の要望に應えるため、天然砥石の火を消してはならじと鉾山に入り採掘し、こつこつと砥石づくりを続ける人がいる。「『研ぎ』は日本が世界に誇るべき伝統文化」と語る、創業百三十五年の砥石採掘業「砥取家」の土橋さん(六二)。京都産天然砥石の伝統を守り伝えている。



●天然砥石づくり一筋に

大工さんの世界では「穴彫り二年、鋸五年、

墨付け八年、研ぎ一生」といわれるらしい。師匠に弟子入りすると、まず大工道具の刃を研ぐことから覚えさせられるとも聞く。